

# 保育士スキルを生かした介護福祉士養成の 取り組みについて

About Efforts of Certified Care Worker Training Making Use of  
Nursery Teacher's Skills

伊 藤 弓 月

# 保育士スキルを生かした介護福祉士養成の取り組みについて

## About Efforts of Certified Care Worker Training Making Use of Nursery Teacher's Skills

伊藤 弓月

Yuzuki ITO

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words : 介護福祉士養成、保育士養成、サークル活動、ボランティア活動

### はじめに

全国的な介護福祉士養成校の定員割れが叫ばれる中、本学専攻科福祉専攻（以下「専攻科」と称す）においても例外ではなく定員充足には至っていない。先だつての国による在留資格「介護」創設の影響もあってか、介護福祉士養成校の多くを占める2年課程の養成校では、定員割れ解決の切り札として外国人留学生獲得による定員充足を目指す動きが増えつつある。だが、保育士資格所有者を対象とした1年課程の介護福祉士養成課程である本学専攻科では、外国人留学生獲得による定員充足は資格要件の問題もあり現時点において不可能である。そもそも専攻科の母体、保育士養成2年課程である本学幼児保育学科（以下「学科」と称す）の学生達は、児童や保育に興味関心があつて保育士や幼稚園教諭を目指し入学してきた学生達である。そのような学生達に対し、児童や保育のみならず高齢者や介護にも興味関心を持って専攻科進学を目指してもらうべく、本学でも2年間の学科在籍中、ミニオープンキャンパスをはじめとする様々な取り組みを実施している。しかしながら、プラス1年で介護福祉士を取得すべく専攻科に進学しようとする学生を輩出することは、今日の我が国における介護や介護職に対するイメージ等の影響もあってか、困難極まりないのが現状である。そのような状況下にある中、定員充足を目指す上で改めて本学専攻科の特色とは何か、また1年課程ならではの強みを生かした介護福祉士養成教育とは何かについて、学内・学科内での検討を重ね続けた。その結果、本学専攻科ではH28年度より“保育士スキルを生かした介護福祉士養成”を目標に掲げ、学科と連携した介護福祉士養成教育への取り組みを開始した。

### 2. 学科教員による専攻科講義への参加

“保育士スキルを生かした介護福祉士養成”の取り組みにおいて中核となるのが、本項で掲げる『学科教員による専攻科講義への参加』である。そもそも同じ幼児保育学科とはいえ、介護福祉士養成課

程と保育士養成課程は全く別物であり、本学でも学科教員は専攻科の講義を担当していない。だが、上述の学科と連携した介護福祉士養成教育への取り組みを実現すべく、本学では既存の専攻科講義科目のうち数科目において、ゲストティーチャーという形で学科教員（修士以上の学位を有する専門性を持った事務職員も含む）にそれぞれの専門性を生かした講義を実施してもらっている。

以下の表1から表3に、H29年度における同取り組みの実施状況を示す。

表1 科目「介護の基本Ⅰ」（前期・15回）における学科教員講義実施状況

講義回	担当教員	講義テーマ
第9回目	教育系科目 担当教員	「死生観、尊厳死を考える」
第13回目	本学事務職員	「生活環境の重要性 ～利用者にあった生活の場～」

表2 科目「コミュニケーション技術Ⅰ」（前期・15回）における学科教員講義実施状況

講義回	担当教員	講義テーマ
第7回目	表現系科目（音楽） 担当教員	「高齢者や障がいのある方々との音楽を通じた コミュニケーション実践」
第8回目	表現系科目 （体育）担当教員	「高齢者のグループ活動場面におけるレクリエーション」
第10回目	表現系科目（造形） 担当教員	「高齢者や障がいのある方々との美術・芸術を通じた コミュニケーション実践」
第11回目	表現系科目（造形） 担当教員	「高齢者や障がいのある方々との創作活動を通じた コミュニケーション実践②」

表3 科目「コミュニケーション技術Ⅱ」（後期・15回）における学科教員講義実施状況

講義回	担当教員	講義テーマ
第6回目	心理系科目 担当教員	「精神障害の特性に応じたコミュニケーション実践」
第9回目	表現系科目（音楽） 担当教員	「高齢者や障がいのある方々との音楽を通じた コミュニケーション実践②」
第10回目	表現系科目（体育） 担当教員	「高齢者や障がいのある方々との健康・体力づくりを 通じたコミュニケーション実践」
第11回目	福祉系科目 担当教員	「知的障害の特性に応じたコミュニケーション実践」

表1から表3に示した内容による講義を実施する際に留意した点を2点挙げる。まず1点目は、講義実施にあたっては、該当科目である「介護の基本Ⅰ」、「コミュニケーション技術Ⅰ・Ⅱ」の各テキスト記載内容に極力沿う形で実施することを心掛けたこと、2点目は、実際の介護現場等において、学生達が2年間の保育士養成課程で修得した保育士スキルをいかに発揮できるかという点に主眼を置いたことである。さらに各学科教員には、高齢者施設や障がい者施設等の生活場面において、音楽を楽しむ、製作活動を行う、あるいは体を動かすといった活動を想定してもらった上で、各教員が持つ専門性との関係性を意識した講義を実施してもらった。

H28年度より同取り組みを開始し今年度で2年目となるが、専攻科講義を担当する教員数が少ない中、保育士養成課程での2年間で慣れ親しんだ学科教員がゲストティーチャーという形で再登場することもあり、専攻科学生達には概ね好評である。また、学科を卒業し新たに介護の勉強に取り組んでいる専攻科学生達に対し、久しぶりに講義を実施する学科教員にとっても、良い意味で刺激になっているとの意見を数名の教員より聞いたことから、学科教員にも改めて介護福祉士養成に対する理解を深めてもらったのではないかと考える。

講義日程を調整の上、本来の学科講義とは別内容での専攻科講義を引き受けていただいた学科教員の方々には、感謝の念に尽きない。

### 3. サークル・ボランティア実践演習

本学（特に幼児保育学科）では、障がい児・者を対象としたスポーツ・運動あそび等の機会提供を行うサークル活動をはじめ、高齢者・障がい者施設等での音楽・レクリエーション活動、さらには園児等を対象としたビオトープ活動など、福祉分野におけるサークル活動が盛んである。そこで学科としてもそのような活動の重要性を考慮し、H28年度より、学生がサークル・ボランティア活動を行う為の時間を確保・保障することを目的に、木曜2時限目を「サークル・ボランティア実践演習」とし、この時間帯には他の講義を入れないよう設定している。同様に専攻科でも、木曜2時限目は学科と“一体化”して「サークル・ボランティア実践演習」の時間とし、他の講義を設定していない。ただでさえ1年課程の本学専攻科は時間割に余裕が無く、殆ど空きコマが無い状況にも関わらずである。

一見するとこの取り組み自体、“保育スキルを生かした介護福祉士養成”とは無関係のように思える。しかしながら、前述のように本学専攻科は児童や保育に興味関心を持っている学生達はその入学者のベースとなっていることから、単に介護を“押し売り”するようなやり方では専攻科入学者の獲得にはつながらない。事実、ここ数年は専攻科への進学志望動機の半分近くが、障がい児・者支援に対する興味関心からの進学である。

そもそも社会福祉士及び介護福祉士法第2条2項において、介護福祉士を「専門的知識及び技術をもつて、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うことを業とする者」と規定しており、決して介護福祉士を高齢者介護の専門職と規定している訳ではない。むしろ、今日では障害者総合支援法における障がい福祉サービスの重要度は増し、その従事者育成の必要性も叫ばれていることもあり、当該分野における介護福祉士の需要も高まっている。

そこで本学専攻科の学生募集活動においては、専攻科でも障がいについての勉強もできるどころ

か必ずしなければならないことを説明の上、専攻科における介護実習のうち、障がい者支援施設等での実習を希望する学生に対しては、介護実習Ⅰ-①、もしくは介護実習Ⅰ-②のいずれか1度、障がい者支援施設等での実習実現を可能とする体制が出来つつある。

したがって、木曜2限のサークル・ボランティア実践演習の設定は、学科・専攻科の学生、即ち3学年が共にサークル・ボランティア活動を行うことで、障がい児・者を含めた福祉分野に関する興味関心が高まることを意図すると共に、学科の学生が専攻科での学びに関心を持つ、また実際の様子を専攻科学生より直接聞く機会が生まれることを狙いとしている。学科の学生にとって専攻科学生より直接専攻科の様子を聞けることは、教員が専攻科進学を薦めるよりも、時に強力な説得力を有している場合もある。

入学当初は児童や保育への関心しか持たなかった学科の学生が、入学後にサークル・ボランティア活動を通じ、次第に障がい児・者をはじめとする福祉分野へも関心を持つようになる。そして、サークル・ボランティア活動を共にする専攻科学生より専攻科での学びを見聞きすることで、児童や保育に加え、障がい児・者支援を含めた介護の魅力に気付き、結果として専攻科進学を志す。このような一連のプロセスを経た上で、学科より1人でも多くの専攻科進学者が誕生することを強く願うものである。

何より、このような学科と一体化した取り組みは、前項の『学科教員による専攻科講義への参加』を直接的な取り組みであるとするならば、本項の『サークル・ボランティア実践演習』は、間接的な意味での“保育士スキルを生かした介護福祉士養成”の取り組みと言えるのではないかと筆者は考える。

#### 4. 今後の課題

H28年度より本学専攻科において取り組みはじめた“保育士スキルを生かした介護福祉士養成”については、まずこの取り組みが実際の介護現場等においてどの程度有効性があるのか、その検証を行う必要があると考えられる。その具体的な方法としては、H28年度以降の卒業生とその雇用者に対し、聞き取り調査もしくは質問紙の郵送によるアンケート調査などの方法が考えられる。例えば、専攻科卒業生に対し、介護福祉士として介護職に就いている中、実際の介護現場において保育士スキルが役に立っている場面があるのか、またそのように感じる可能性があるのか等を調査すると共に、一方で彼等の雇用者に対しては、本学専攻科卒業生のように保育士資格を有する介護福祉士と他の介護職との間に、何らかの明確な差が存在するのかを調査し、検証する必要があると考える。

#### 参考文献

- 1) 伊藤弓月 (2018) 「保育士スキルを生かした介護福祉士養成の取り組みについて」第24回日本介護福祉教育学会・第6分科会発表